

現地ルポルタージュ

多角的事業展開で発展

津南町森林組合(新潟県)

津南町森林組合(以下森組)は、地域の特性を生かしながら、効果的な施設投資と、確かな時代認識をもとに、実に多角的な事業活動を進めている。

組合施設地には、組合事務所のある林業センターを中心に、製材・木工・オガ粉・食品の各工場、なめこ培養センター、きのこ共選場等の各施設が集積し、面積は4haにもおよび、一大林業コンビナートの感を呈している。パートを含め一四〇名に達する職員も若い。正組合員数一四五〇名。組合員所有山林面積はおよそ五千ha。

事業が多角的であるだけなら、他にも例を見ようが、津南町森組の優れているところは、きのこ協業体の育成に象徴されるように、組合と組合員組織とを固く結び付けて林家の生活を確立するとともに、組合の経営が安定的に推移していることにある。

一. 津南町森組の位置

津南町は新潟県の最南端中魚沼郡にある。西を長野県栄村と境を接し、町内を信濃川が貫流し雄大な河岸段丘を形成している。段丘は今はまだ雪に覆われているが、九段にもおよび棚田は先人の苦勞の程を忍ばせる。

東京からは、上越新幹線で約一時間半、そこからさらにバスで一時間程揺られるところに在る。人口およそ一万三千人。名うての豪雪地帯である。

二. 組合の歩み

町内の総面積(一万七千ha)に占める山林原野は、七〇%に達し典型的な山村である。しかし、広葉樹林が多く、その山林資源は有効活用されないまま、わずかに薪炭業が続けられていたのみであった。それも燃料革命によつて衰退する。

昭和四二年に現山田組合長が中心となり森林組合が設立されるが、こうした山林資源の有効活用を期してのものであった。そのためには森林構造改善事業の受け皿としても森林組合が必要とされた。人口減少が続くなか、町の基幹産業としての林業の振興と住民雇用の場の確保とが緊急の課題でもあったからである。

組合は曲折を経ながら今日を迎えるが、初期のチップ工場経営による造林・林産型経営から、順次木材、食品加工、きのこ事業へと展開し、今後は環境保全のための森林整備を進め長伐期(百年生)優良大径木生産を目指している(現在は七〇年生の杉

が主体、人口林率三八%)。

この間の組合運営の特徴は、それぞれの事業展開に明確な目標と「地域に産業を興して生活の安定を築く(組合長)」という確固たる理念が存在する、経営管理の徹底による経営の安定化が図られている、

手がけた事業や活動が不十分とみれば潔く撤退している、国、県、町との連携のもと各種施策を有効利用している、などがあげられよう。

三. 事業概況

ここでは、組合事業の中核をなす、食品加工販売となめこ等きのこの受託販売事業にしばつて概要を見よう。

(一) 食品加工販売

山菜(うど、わらび等)および農産物(にんじん、大根等)加工販売事業の平成十一年度の取扱高は七九一百万円、前年度比約一億円の増加である。その七五%を日本食研(株)に惣菜として販売している。食品加工は豊富な資源である山菜加工として組合設立直後の昭和四四年から開始されているが、周年の安定操業を模索する過程で、日本食研(株)との本格取り引きが昭和六二年から開始される。

日本食研(株)との取り引きは事業の伸長と安定化に大きく寄与することになる。原料は全て買取り、農産物は農協から流通規格外品を引き受ける。地元産だけでは賄いきれず、業者仕入れにも依存している。しか



食品工場内部

し、組合員との結びつきが組合の基本である」からと、地場資源を生かした原料確保のため、昨年から放置され荒廃している畑を利用し、研究費の名目で補助金をつけ、うど、ふき栽培を奨励している。

昭和四四年に特殊林産物生産加工工場としてスタートした施設は、平成一〇年の新工場建設に至るが、一単位組合事業とはとても考えられないほどの設備を備えている。

(二)きのこ類受託販売  
もう一つの組合事業の柱は、きのこ類の受託販売である。平成十一年度の取扱高は八六四百万円で、一三六トンのうちなめこが一七八トンと大宗を占め、他にえのき、まいたけ、しいたけがある。

きのこの生産、販売を特徴づけるのは、



出荷を待つなめこ(中深見きのこ組合)

生産協業体を組合が育成したことである。現在五、七組合員で組織する協業体(ほとんどがなめこ)が二〇組合ほどある。生産協業体が生産し、組合共選場で選別し、出荷される。市場出荷が七割(うち関東圏六五%)、量販店直販が三割である。取扱い手数料は二・八%。

主力をなすなめこ生産に着手したのも早く、組合設立まもなくである。チップ工場ダストの有効利用をねらったものだが、本格展開は、昭和五二年以降の生産協業体設立からである。協業体設立にあたって、山田組合長は二つの方針を徹底している。一つは同じキノコのなかからなめこに絞って勧めたこと。えのき、しいたけに比べ、なめこは手間がかかるため企業の参入は遅

れるであろうと見通したこと。二つは自身の農協専務の経験から林家経済を考え、技術は生産者自らの体得に委ね経営管理指導に純化したことである。その後の発展をみれば、慧眼であったと言える。

組合では、オガ粉製造機械を二台所有し、培養センターで菌を植え付け、たうえで、生産者に供給する。

#### 四・課題、悩み

主要二事業しか紹介できなかったが、組合は各事業を多角的、効率的に展開しながら、例年二、四千万円の当期剰余金をあげて、組合経営は順調に推移し、組合員の生活も安定を保っている。しかし問題点や悩みはないのだろうか。

組合長はまず林政の画一性と硬直性を、「霞ヶ関は全国一律の目でしかみていない」という言い方で表現し、林業のあり方や将来について国がもっと真剣に考えてもらいたいと、林業に携わる現場での苦悩を吐露する。組合内部の課題としては管理職になりうる人材の不足をあげた。他人に言われればやるが、哲学、ビジョンがない」と手厳しい。主力の食品加工については「数年先の見通しはありますけどね」と、将来を楽観視していないことを示す。たしかに、消費者の選択が進むなか食品加工が今後伸び長であるのか、組合経営にとっては大きな課題である。

(平井 隆)